

富山高専生の中国語学習動機の比較研究

陶佳*

A Comparative Study of Chinese Language Learning Motivation among Toyama Kosen Students

TAO Jia*

This study investigates Chinese language learning motivation among students at Toyama Kosen, focusing on gender and departmental differences. Results show male students mainly aim to earn credits, while female students emphasize career advancement, travel, and communication. Overall, students prioritize daily conversation and listening-speaking skills, yet find listening and pronunciation most challenging. Departmental contrasts are evident: business majors value promotion and employment, whereas engineering majors display more passive learning. The study highlights motivational patterns and offers educational implications.

キーワード：高専生，中国語教育，学習動機，性別傾向，学科差異，比較研究

1. はじめに

近年、日本における中国語学習者の数は着実に増加しており、国際交流や経済的結びつきの強化に伴い、中国語の重要性はさらに高まりつつある。特にアジア地域を中心とした人的交流やビジネス環境の広がりの中で、中国語の習得は将来の進路選択や職業的可能性を広げる手段として注目されている。

日本の高等専門学校（以下、高専）は、実践的な技術者の育成を目的とする 5 年一貫の教育制度を採用しており、大学とは異なる独自の教育理念とカリキュラムを備えている。外国語教育については主に英語が中心であるが、近年では第二外国語として中国語を導入する高専も増えている。その中で、富山高専は最も早い段階から中国語教育を取り入れてきた学校として位置づけられる。

本研究では、富山高専の中国語履修者を対象に、

*国際ビジネス学科

e-mail:toh@toyama.kosen-ac.jp

学習動機の実態を調査・分析する。特に、国際ビジネス学科・電子情報工学科・商船学科という教育背景の異なる三つの学科の中国語学習者を比較し、性別差を含めた学習動機の特徴を明らかにすることを目的とする。さらに、その分析を通じて、高専における第二外国語教育の改善に向けた教育的示唆を得ることを目指す。

2. 調査概要と方法

本研究の調査対象は、富山高専における中国語履修者（以下、高専生）の中、国際ビジネス学科 4 年生（以下、K4）30 名、電子情報工学科 4 年生（以下、I4）37 名、商船学科 5 年生（以下、S5）18 名の計 85 名であり、男女比は男子 40 名、女子 45 名であった。調査には記入式の複数回答アンケートを用い、学習動機・学習意識・学習上の困難点などに関するデータを収集した。

調査項目の設計にあたっては、王志剛・倪伝斌・王際平・姜孟（2004）および陶琳（2014）の研究枠組みを参考にし、日本の高専学生の特徴に合わ

せていくつかの項目を追加した。これにより、既存研究との比較可能性を確保しつつ、高専生の実態に即したデータ収集を行った。

アンケートは以下の五つの質問で構成されている。

質問 1. なぜ中国語を学ぼうと決意したのか。

質問 2. 中国語について主に何を学びたいと考えているか。

質問 3. 中国語学習において最も困難だと感じる点は何か。

質問 4. 中国に対してどのような点に興味を抱いているか。

質問 5. 中国語を教える教員にどのような期待を寄せているか。

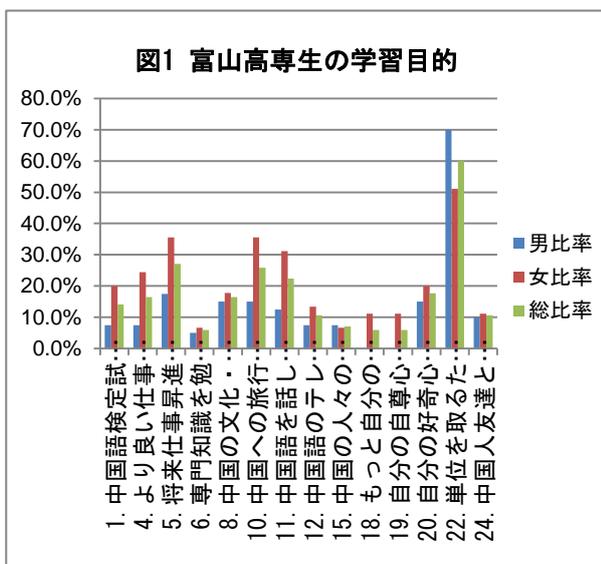
本研究では、三つの学科に所属する中国語学習者の回答を比較し、性別・学科背景による違いや共通点を明らかにすることを目的とした。

3. 学習動機の分析

本章では、質問 1～質問 4 の回答結果をもとに、富山高専生の中国語学習動機の特徴を整理し、性別による違いを含めて考察する。

3.1 質問 1：学習目的

質問 1 では、24 項目からなるカテゴリーを複数回答で尋ねた。その傾向は図 1 に示した。



(注：データがゼロの項目(例：2、3、7、9等)は、グラフには反映していません。)

調査結果によると、最も多く選択された学習目的は「単位を取るため」であり、全体の 60.0% (男子 70.0%、女子 51.1%) を占めた。特に男子学生では 7 割に達しており、主体的な学習意欲よりも制度的要因による受動的履修が強いことが示唆される。

次に多かったのは「将来、仕事で昇進する機会を増やすため」(27.1%) で、女子学生では 35.6% と高かったのに対し、男子学生は 17.5% にとどまった。この点から、女子学生のほうが語学習得をキャリア形成に積極的に結び付けて考えている傾向が伺える。

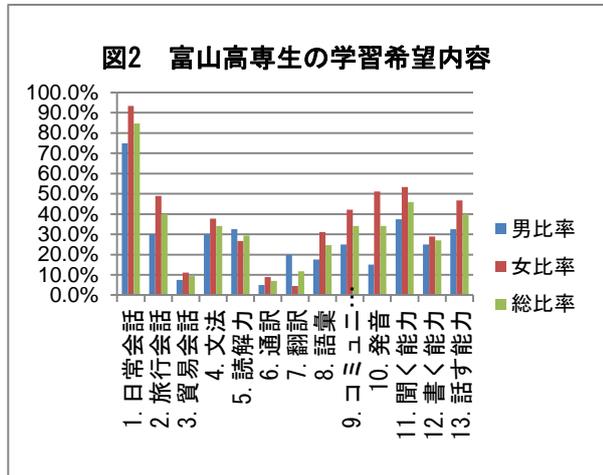
第 3 位は「中国への旅行を容易にするため」(25.9%) であり、女子学生 (35.6%) が男子学生 (15.0%) を大きく上回った。第 4 位の「中国語話者との交流や友人づくり」(22.4%) についても同様に女子学生 (31.1%) が男子学生 (12.5%) より高かった。これらは女子学生が実生活との関連や異文化交流への関心を強く持っていることを示している。「自分の好奇心・新知識の探究」(17.6%)、「中国文化・習慣・芸術への興味」(16.5%) の項目は男女差が比較的小さく、どちらも 2 割未満であった。一方、「より良い仕事を見つけるため」(16.5%) や「中国語検定・HSK 等の資格取得」(14.1%) は女子学生が男子学生より顕著に高く、自己成長や資格取得を意識している様子がうかがえる。

以上の結果から、富山高専生の学習動機には以下の傾向が見られる。

1. 男子学生は「単位取得」の割合が極めて高く、主体性・積極性は相対的に低い。
2. 女子学生は「単位取得」以外にも、「将来仕事の昇進機会」「中国への旅行」「交流」など、将来の展望や実生活との関連を意識した動機が多く見られ、語学習得に対する積極的な姿勢が窺える。
3. 特に技術系学科の男子学生では、卒業後の進路が早期に確定する場合が多く、語学力が進路に直結しづらいと捉えられやすいため、受動的動機へと偏る傾向がある。

3.2 質問2：学習したい内容

質問2「あなたは中国語について主に何を学びたいと考えていますか」では、13項目からなるカテゴリーを複数回答で尋ねた。本節では、その回答傾向を性別の比較を含めて整理する。図2に示すように、その傾向が見られる。



調査結果によると、男女を問わず最も多くの学生が「日常会話」(84.7%)を学びたいと回答しており、特に女子学生では93.3%と非常に高い割合を示した。男子学生(75.0%)との差は18.3ポイントであり、女子学生の方が日常的なコミュニケーション能力の習得に強い関心を寄せていることがうかがえる。

次いで多かった項目は、「聞く能力」(45.9%)、「話す能力」(40.0%)、「旅行会話」(40.0%)であり、いずれも女子学生が男子学生より約15ポイント高い選択率を示した。これらは、実際のコミュニケーション場面で役立つ技能へのニーズが高いことを反映していると考えられる。

また、「発音」(34.1%)と「コミュニケーション能力」(34.1%)も3割強の学生が希望を示したが、ここでも男女差が顕著であった。特に「発音」では女子学生51.1%に対し、男子学生は15.0%と大きな開きがあり、発音への意欲や関心に明確な差が見られた。「コミュニケーション能力」についても女子学生(42.2%)が男子学生(25.0%)を大きく上回った。

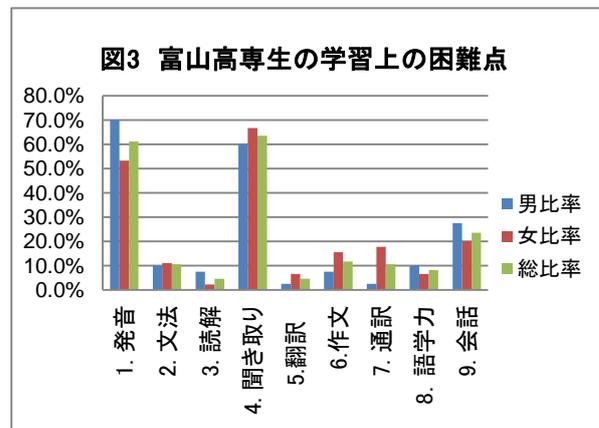
一方、「文法」(34.1%)、「読解力」(29.4%)、「書く能力」(27.1%)などの基礎的な言語技能につい

ては、男女間の差が比較的小さく、全体として3割前後の選択率であった。さらに、専門性の高い「貿易会話」(9.4%)、「通訳」(7.1%)、「翻訳」(11.8%)はいずれも1割前後にとどまり、学生の関心が実務的な専門技能よりも、日常的・実用的な言語運用能力に向けられていることがわかる。

以上の結果から、富山高専生が中国語学習において重視しているのは、専門的な技能ではなく、日常生活や旅行、交流などに直結する「会話力」や「コミュニケーション能力」であることが明らかになった。これは、翻訳アプリやAIツールが普及する現代においても、実際に人と対話し、状況に応じて適切に意思疎通を行う力が依然として重視されていることを示している。

3.3 質問3：学習上の困難点

質問3「中国語学習において最も困難だと感じる点は何か」では、9項目から複数回答で困難点を尋ねた。本節では、学生がどのような点を難しいと感じているのかを整理し、性別の違いも含めて考察する。図3に示すように、その傾向が見られる。



調査結果によると、富山高専生が最も困難だと感じている項目は「聞き取り」(63.5%)であり、男女とも高い割合を示した(男子60.0%、女子66.7%)。この結果は、中国語特有の音声的特徴に基づく聴解力の習得が、学習者にとって大きな課題であることを示している。

次に多かったのは「発音」(61.2%)であり、男子学生では70.0%と非常に高く、女子学生の53.3%との差は16.7ポイントに及んだ。中国語は

声調や音節構造が複雑であり、母語が日本語である学習者にとっては発音習得が困難であることは、先行研究でも指摘されている（丁 2012）。本調査でもその特徴が明確に反映されている。

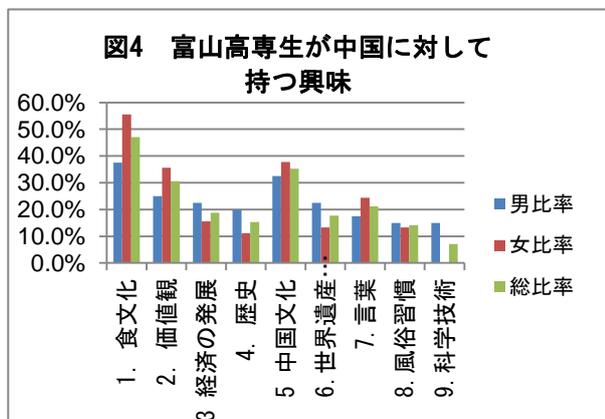
第3位は「会話」（23.5%）で、男女とも2割強の学生が困難を感じている。これは、実際の場面で適切に文を生成し応答することの難しさを示していると考えられる。続く「作文」（11.8%）では女子学生（15.6%）が男子学生（7.5%）を上回り、「文法」（10.6%）や「通訳」（10.6%）も全体の1割程度にとどまった。

その他、「読解」（4.7%）、「翻訳」（4.7%）、「語学力」（8.2%）などは比較的低い選択率であり、学習者が感じる困難は「音声理解」と「発音」に集中していることが明らかとなった。

以上の結果から、高専生が中国語学習において最も困難だと感じているのは「聞き取り」と「発音」であり、これは中国語の音声特性や、学習環境におけるリスニング・スピーキング練習の機会の限界とも関連していると考えられる。特に男子学生において「発音」への苦手意識が顕著であり、今後の授業設計においては、音声面の支援や反復練習を強化する必要があるといえる。

3.4 質問4：中国への興味

質問4「中国に対してどのような点に興味を抱いているか」では、9項目の複数回答形式で関心領域を調査した。図4に示すように、その傾向が見られる。



調査結果によると、最も関心が高かった項目は「食文化」（47.1%）であり、特に女子学生では

55.6%と過半数を超えた。男子学生（37.5%）との差は18.1ポイントで、女子学生が生活文化や食文化への関心を強く持っていることが示された。次いで「中国文化」（35.3%）、「価値観」（30.6%）への関心が高く、いずれも3割以上の学生が興味を示した。これらは、中国語学習を通じて文化的背景や社会的思考への理解を深めたいという意識の表れと考えられる。「言葉」（21.2%）への関心は2割前後にとどまり、語学そのものよりも文化・社会的側面への関心が優先されている傾向が見られた。「経済の発展」（18.8%）、「世界遺産と名所」（17.6%）、「歴史」（15.3%）、「風俗習慣」（14.1%）はいずれも1割超2割未満で、比較的関心は低めであった。

性別で見ると、女子学生は「食文化」「価値観」「中国文化」「言葉」への関心が高く、生活文化や人間関係に関連する領域に強い興味を持つ。一方、男子学生は「経済の発展」「歴史」「世界遺産と名所」「科学技術」への関心が高く、社会・技術面に対する関心が強いことが明らかとなった。

以上の結果から、富山高専生の中国に対する関心は性別によって異なり、女子は文化・生活面、男子は社会・技術面に関心を寄せる傾向があることが分かった。この違いは学習動機や将来の進路意識とも関連しており、教育設計においてはこうした関心の多様性を考慮した内容構成が重要である。

3.5 全体的学習動機のまとめ

本章では、富山高専生全体を対象に、中国語学習の動機を性別の観点から整理した。調査結果から、以下のような傾向が確認された。

第一に、男子学生は「単位取得」を目的とする割合が非常に高く、学習姿勢は受動的な傾向が見られた。これに対し、女子学生は「昇進機会の拡大」「旅行」「交流」など、将来や実生活に直結する目的を重視しており、語学習得に対して積極的な姿勢を示している。

第二に、学習希望内容としては、男女とも「日常会話」が最も多く選択され、次いで「聞く能力」

「話す能力」が重視されていた。女子学生は特に「発音」や「コミュニケーション能力」への関心が高く、男子学生との差が顕著であった。

第三に、学習上の困難点としては「聞き取り」と「発音」が中心であり、音声面での習得が大きな課題となっている。男子学生では「発音」、女子学生では「聞き取り」に対する困難感がやや強く表れていた。

第四に、中国への関心については、女子学生が「食文化」「価値観」「中国文化」など生活文化的側面に強い興味を示す一方、男子学生は「経済の発展」「歴史」「科学技術」など社会的・技術的側面への関心が高かった。

以上の結果から、富山高専生の中国語学習動機は性別によって特徴的な違いがあり、教育設計においてはこうした差異を踏まえた対応が求められる。

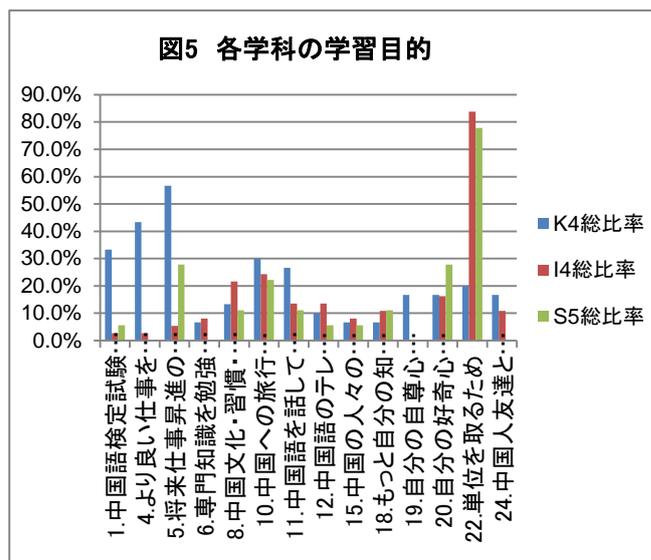
4. 学科間の学習動機の比較分析

本章では、三つの学科に所属する中国語学習者の回答を比較し、学習動機の特徴を整理するとともに、学科背景による違いや共通点を考察する。

4.1 学科間の学習目的の比較分析

本節では、国際ビジネス学科4年生（K4）、電子情報工学科4年生（I4）、商船学科5年生（S5）の中国語履修者を対象に、中国語学習目的の違いを比較した。その結果、図5に示すように、学科ごとに明確な傾向の差が確認された。

まず、K4では「将来の昇進機会を増やすため」が最も多く選択され、全体の56.7%を占めた。男女とも半数以上がこの目的を挙げており、キャリア形成を強く意識していることが読み取れる。これに対し、I4では同項目を選んだ学生はわずか5.4%にとどまり、K4との間に大きな差がみられた。S5では27.8%とK4より低いものの、I4よりは高い割合を示した。特にS5女子では40%が昇進を目的に挙げており、学科間での意識の差が明確に表れている。



(注：データがゼロの項目は、グラフには反映していません。)

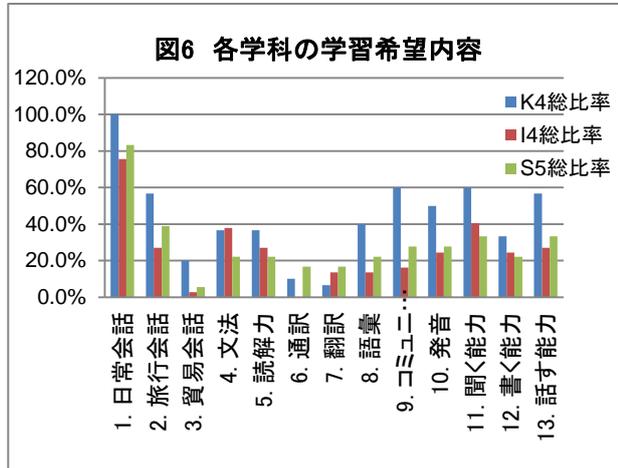
次に、K4では「より良い仕事を見つけるため」が43.3%と第2位であり、男女とも4割を超えている。一方、I4では2.7%、S5では0%と極めて低い。これは、理工系学科の学生が比較的早期に進路を決定する傾向があるため、語学力を就職に直結させて考える意識が弱いことを示している。さらに、K4では「中国語検定試験／HSK試験等に合格するため」が33.3%で第3位となった。資格取得を重視する傾向が文系学生に強く見られる一方、I4やS5では1割未満にとどまった。これは、高専教育が実務性や資格取得を重視する一方で、理工系学生は語学資格を進路に結びつけにくいと考えている可能性を示唆している。

また、「中国への旅行を容易にするため」はK4で30.0%、I4で24.3%、S5で22.2%と、いずれも2割以上の学生が選択している。特にK4女子では36.0%と高い割合を示し、旅行や交流を通じた語学活用への関心が強いことが分かる。

以上の結果から、学科間の学習目的には明確な差異が存在することが確認された。国際ビジネス学科の学生はキャリア形成や資格取得を重視する傾向が強く、電子情報工学科や商船学科の学生は比較的受動的な学習姿勢を示す傾向がある。こうした違いは、学科ごとの教育内容や進路決定の時期と密接に関連していると考えられる。

4.2 各学科の学習希望内容の比較分析

図6は、富山高専の各学科に所属する学生が中国語学習において重視する内容に関するアンケート結果を示している。全体的には三学科に共通する傾向が見られる一方で、性別や学科の教育的特徴による違いも確認された。



まず、男女を問わず三学科とも最も多く選択された項目は「日常会話」である。国際ビジネス学科 (K4) では男女とも100%の回答率を示し、電子情報工学科 (I4) では男子が68.2%と最も低い割合であったが、女子は86.7%に達した。商船学科 (S5) でも男女とも8割を超えており、いずれの学科でも高い関心が示されている。

次に、K4では「コミュニケーション能力」(60.0%)と「聞く能力」(60.0%)が第2位であった。これに対し、I4では「聞く能力」(40.5%)が第2位であるものの、K4より約20ポイント低い結果となった。また「コミュニケーション能力」は16.2%にとどまり、I4の学生にとってはあまり重視されていないことが明らかとなった。S5では「旅行会話」(38.9%)が第2位であり、K4よりは低いものの、I4よりは高い割合を示した。

さらに、K4では第3位に「旅行会話」(56.7%)と「話す能力」(56.7%)が並び、いずれも5割を超えている。I4では「文法」(37.8%)が第3位であり、K4(36.7%)との差はほとんどなかったが、S5(22.2%)よりは高い割合を示した。S5では「聞く能力」と「話す能力」がともに33.3%で第3位となった。

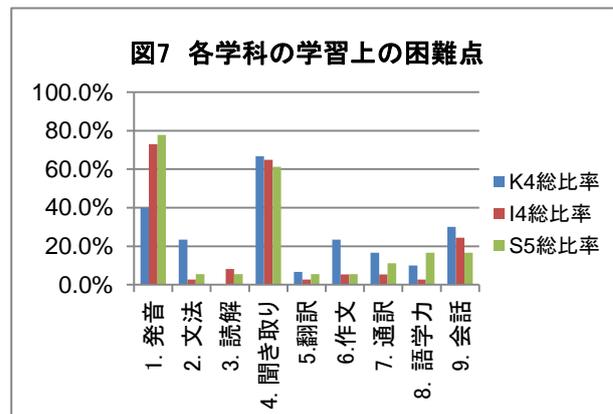
K4の第4位は「発音」(50.0%)であり、特に女子学生では56.0%と最も重視されていた。I4では「旅行会話」「読解力」「話す能力」がいずれも27.0%で第4位となり、特に男子学生は「読解力」(40.9%)を最も重視していた。S5では「コミュニケーション能力」と「発音」がともに27.8%で第4位となった。

続いて、K4では「語彙」(40.0%)、「文法」(36.7%)、「読解力」(36.7%)、「書く能力」(33.3%)も一定の割合で重視されていた。I4では「発音」と「書く能力」が24.3%であり、2割を超える関心が示された。S5では「語彙」「文法」「読解力」「書く能力」がいずれも22.2%で並んでいた。これらの結果から、基礎的な言語技能には一定の関心が示されている一方で、「翻訳」「通訳」「貿易会話」などの専門的スキルはどの学科でも1割前後にとどまり、実務的な言語運用よりも日常的・交流的な能力の習得が優先されていることが分かる。

以上の結果から、翻訳アプリやAIツールが普及する現代の学習環境において、高専生は「翻訳」「通訳」といった専門スキルよりも、「会話力」や「コミュニケーション能力」の習得を重視する傾向が明らかとなった。これは、旅行や留学、対人交流など実生活の場面で活用できる実用的な言語能力へのニーズが高まっていることを示している。

4.3 各学科の学習上の困難点の比較分析

本節では、各学科の学生が中国語学習においてどのような困難を感じているかを比較した。その結果、図7に示すように、学科ごとに困難の内容や強調点に違いが見られた。



まず、K4 の学生が最も困難だと感じている項目は「聞き取り」(66.7%)であり、特に K4 女子では 76.0%と突出して高く、K4 男子 (20.0%) との差は 56 ポイントに及んだ。I4 および S5 では「聞き取り」は第 2 位であり、いずれも 6 割を超えているが、K4 との差は比較的小さい。性別で見ると、I4 では男女とも 6 割を超えており、S5 では男子 69.2%、女子 40.0%と 29.2 ポイントの差がみられた。

K4 の第 2 位は「発音」(40.0%)で、男女とも 4 割が困難と回答した。一方、I4 と S5 では「発音」が最も困難な項目であり、いずれも 7 割を超えている。K4 と比較すると、I4 は 33 ポイント、S5 は 37.8 ポイント高い結果となり、両学科で発音への苦手意識が顕著であることが明らかとなった。男女差も小さく、幅広い学生が音声面で課題を抱えていることが分かる。

K4 の第 3 位は「会話」(30.0%)であり、I4(24.3%)、S5 (16.7%) と比較して高い割合を示した。性別で見ると、S5 女子では 0%であったのに対し、K4 男子は 80.0%と非常に高く、学科・性別で大きな差が確認された。他の学科では 2 割前後に集中し、比較的均一であった。

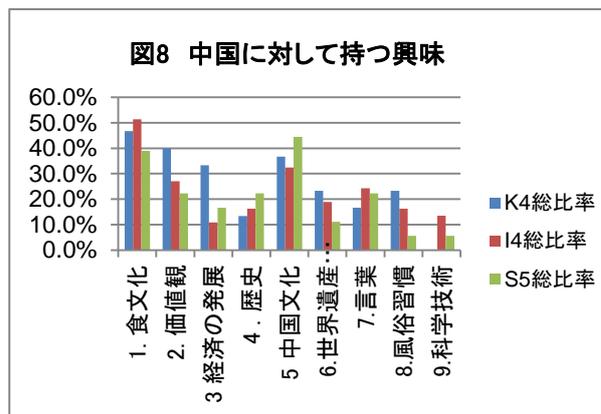
K4 の第 4 位は「文法」と「作文」(23.3%)であるのに対し、I4 と S5 ではこれらを困難とする回答は 1 割未満にとどまり、学科による差がみられた。その他の「読解」「翻訳」「通訳」などの項目は、いずれの学科もおおむね 1 割前後であり、困難度が比較的低いと認識されている。

以上の結果から、三学科に共通して中国語学習の最大の困難点は「発音」と「聞き取り」であることが確認された。特に I4 と S5 の学生では「発音」への苦手意識が強く、音声面の理解と発話訓練の強化が今後の教育設計における重要な課題となる。

4.4 各学科の中国に対する興味の比較分析

図 8 は、各学科の中国語学習者が中国に対してどのような関心を抱いているかを示したものである。三学科に共通する傾向が見られる一方で、性

別や教育背景による特徴的な差も明確に表れている。



まず、三学科において最も関心が高かった三項目は「食文化」「中国文化」「価値観」であったが、順位には差が見られた。K4 と I4 では「食文化」が第 1 位であり、K4 は 46.7%、I4 は 51.4%といずれも半数前後であった。S5 では「食文化」は 38.9%で第 2 位となり、K4・I4 よりやや低い傾向がみられた。性別に着目すると、どの学科でも女子学生のほうが男子学生より食文化に強い関心を示し、特に I4 女子では 66.7%と 6 割を超えていた。

次に「中国文化」について見ると、K4 では 36.7% (第 3 位)、I4 では 32.4% (第 2 位)、S5 では 44.4% (第 1 位) と、いずれの学科でも 3 割以上が関心を示した。S5 では男女とも 4 割を超えており、特に S5 男子は 46.2%と突出して高かった。一方、K4 では女子 (40.0%) が男子 (20.0%) を 20 ポイント上回り、性別差が大きかった。

「価値観」については、K4 では 40.0% (第 2 位)、I4 では 27.0%、S5 では 22.2%であった。性別差を見ると、K4 女子は 44.0%と男子 (20.0%) より 24 ポイント高かった。I4 では逆に男子 (36.4%) が女子 (13.3%) を上回っており、S5 では女子 60.0%に対して男子 7.7%と 52.3 ポイントの極めて大きな差が見られた。

関心の第 4 位にあたる項目を比較すると、K4 では「経済の発展」(33.3%)が多く、I4 (10.8%)、S5 (16.7%) より高い割合を示した。特に K4 男子の 60.0%は本項目への強い関心を反映している。I4 では「言葉」(24.3%)が第 4 位であり、K4(16.7%)

やS5 (22.2%) より高かった。S5では「歴史」と「言葉」(22.2%) が並んで第4位であり、「歴史」についてはK4 (13.3%)、I4 (16.2%) より高い関心を示した。性別を見ると、どの学科でも男子学生のほうが「歴史」への関心が強かった。一方、「言葉」についてはどの学科でも女子学生のほうは関心が高い傾向があった。

「世界遺産と名所」および「風俗習慣」については、いずれもK4 (23.3%) がI4およびS5より高い関心を示した。性別では、どの学科でも男子学生のほうが「世界遺産と名所」への関心が高く、K4男子では40%に達していた。一方、「風俗習慣」は三学科すべて1割前後にとどまり、高専生全体で関心が低いことがうかがえる。最後に、「科学技術」への関心は女子学生では見られなかったが、I4男子では13.5%と比較的高く、理工系中心の教育背景が影響していると考えられる。

以上の結果から、三学科の中国語学習者はいずれも「食文化」「中国文化」「価値観」に高い関心を示しているものの、性別および学科の特性によって興味の方向性が大きく異なることが明らかとなった。特に女子学生は「食文化」「言葉」など生活・交流に関わる領域への関心が強く、男子学生は「経済」「歴史」「科学技術」など社会構造や技術に関する領域への関心が高い。これらの傾向は学習動機や将来の進路意識とも関連しており、教育設計においてはこうした多様な関心を反映した内容構成が求められる。

4.5 総合的考察

以上の分析から、富山高専生の中国語学習動機には、学科や性別による特徴的な傾向が確認された。男子学生は「単位取得」を目的とする割合が高く、学習姿勢は受動的な傾向が見られる。一方、女子学生は「昇進」「旅行」「交流」など、将来や実生活に直結する目的を重視しており、積極的な学習姿勢を示している。

また、国際ビジネス学科の学生はキャリア形成や資格取得を強く意識するのに対し、電子情報工学科や商船学科の学生は進路が早期に決定される

ため、語学学習を就職に直結させにくい傾向がある。さらに、学習希望内容では「日常会話」「聞く能力」「話す能力」が重視され、困難点としては「聞き取り」と「発音」が中心であることが明らかとなった。

これらの結果は、学科や性別の特性を踏まえた教育設計の必要性を示しており、特に音声面の支援や実用的なコミュニケーション能力の育成が重要であると考えられる。

5. 教員への期待

質問5「中国語を教える教員にどのような期待を寄せていますか」では、学生が教員に求める指導内容や授業形態について自由記述で回答を得た。その結果、学科ごとに異なる特徴が明確に示された。

5.1 K4の学生が教員に期待すること

K4の学生からは、実用的な会話力と文化理解に関する要望が最も多く寄せられた。具体的には、「教科書だけでなく、実際に使える中国語を教えてほしい」「文法だけではなく、中国文化や時事ニュースについても聞きたい」「より実践的な日常会話や中国社会について学びたい」といった意見が多かった。また、「たくさん会話練習がしたい」「中国語で授業を進めてくれるおかげでリスニング力が伸びたので、今後も続けてほしい」といった声もあり、実践的なコミュニケーション力の向上を重視する姿勢が強く表れていた。

5.2 I4の学生が教員に期待すること

I4では、「発音のポイントをわかりやすく教えてほしい」「文法や表現をもっと体系的に学びたい」「学習した文法の使用例を多く示してほしい」「単語をより多く教えてほしい」「日常会話で使える表現も学びたい」など、基礎的な言語能力の習得に関する要望が中心であった。また、「中国語を楽しく、わかりやすく教えてほしい」という声も多く、I4の学生は特に「発音」「文法」「単語・基本表現」への関心が高いことがうかがえる。

5.3 S5の学生が教員に期待すること

S5では、「発音をもっと練習したい」「基礎となる文法や発音を中心に簡単な会話ができるようにしたい」「発音や漢字を丁寧に教えてほしい」「聞き取りや発音が難しいので補習があるとよい」といった声が目立った。S5の学生は、特に発音や聞き取りに関して丁寧な指導を期待していることが明らかとなった。これは、学習上の困難点として「発音」「聞き取り」が高い割合で挙げられていたことと一致している。

以上の結果から、K4は実践的な会話力と文化理解、I4は言語の基礎運用能力、S5は音声面の強化を中心に教員へ期待していることが分かる。これら学科ごとのニーズの違いを踏まえた指導設計が求められる。

6. おわりに

本研究では、富山高専における中国語学習者の動機を、学科間および性別の観点から比較・分析した。その結果、以下のような特徴が明らかとなった。

第一に、男子学生は「単位取得」を主な目的とする傾向が強く、学習姿勢は比較的受動的であることが確認された。一方、女子学生は「昇進機会の拡大」「旅行」「交流」など、将来のキャリアや実生活に直結する目的を重視しており、語学習得に対して積極的な姿勢を示していた。

第二に、学科間の比較では、国際ビジネス学科の学生がキャリア形成や資格取得を強く意識しているのに対し、電子情報工学科や商船学科の学生は、進路が早期に決定される傾向から、語学力を就職に直結させにくいと考える傾向が見られた。これにより、学習目的が「単位取得」に集中する傾向が強まっている。

第三に、学習希望内容としては「日常会話」「聞く能力」「話す能力」が最も重視され、専門的な技能（通訳・翻訳など）は低い選択率にとどまった。これは、学生が中国語を実用的なコミュニケーション

ン手段として捉えていることを示している。

第四に、学習上の困難点として「聞き取り」と「発音」が最も多く挙げられ、音声面での習得が大きな課題であることが明らかとなった。特に男子学生では「発音」に対する困難感が顕著であり、教育設計においては音声面の支援を強化する必要がある。

第五に、中国への関心については、女子学生が「食文化」「価値観」「中国文化」など生活文化的側面に強い興味を示す一方、男子学生は「経済の発展」「歴史」「科学技術」など社会的・技術的側面への関心が高かった。こうした違いは、学習動機や将来の進路意識とも密接に関連している。

以上を総合すると、富山高専生の中国語学習動機は、学科や性別によって多様な特徴を持ち、教育設計においてはそれぞれの特性を踏まえた柔軟な対応が求められる。特に、リスニングや発音の支援を充実させること、学生の関心領域に沿った教材や活動を導入することが、学習意欲の向上と効果的な教育につながると考えられる。

7. 参考文献

1. 王志刚・倪伝斌・王際平・姜孟（2004）“外国留学生汉语学习目的的研究”《世界汉语教学》3：67-78
2. 任利（2008）「日本人大学生の中国語学習に対する動機—因子分析を用いた探究—」『筑波日本語研究』13号：13-32
3. 陶琳（2014）「日本人中国語学習者の学習動機の調査と研究」『外国語教育フォーラム』8：81-90
4. 鈴木ひろみ（2019）「中国語学習の動機づけ変化及び学習継続促進要因」『中央大学論叢』第40号：33-42
5. 丁雷（2012）「日本人学習者の中国語の声調誤用の分析と指導方法について—日本の大学における第2外国語としての中国語教育を例にして—」*Studies in Human Sciences* 7：81-93
6. 富山高等専門学校「学校要覧・カレッジガイド」2023-2025（38～46）